

# 80年を経て発見。大日本帝国剣道形増補加註の討議記録

(剣道日本2017年2月号特集「形を知り剣道を楽しむ」より(3箇所抜粋)

## 【抜粋1】

矢野裕介氏がこの「討議記録」を見つけたことは剣道史上における「大発見」といって差し支えないだろう。

大日本武徳会によって大正元年(1912)に「大日本帝国剣道形」が制定された。その後、大正6年(1917)に1回目の「加註」が施され、さらに昭和8年(1933)に「増補加註」が行なわれて、このとき大日本武徳会はようやく「加註の完成を見るに至った」としている。戦後、昭和27年(1952)に全日本剣道連盟が発足すると、「日本剣道形」と名称を改めたが、30年近くの間、この昭和8年の増補加註版を原本として剣道形が実施されてきた。しかし戦前の表記(旧字体とカタカナ)である原本が読みにくいことが剣道形の技術低下につながっているなどの声があり、昭和56年(1981)になって、原本を現代文に改めた『日本剣道形解説書』が作成され、現在に至っている。

大日本武徳会が行なった大正元年の制定、大正6年の加註に関しては、どのような討議がなされて文言が決めた

れたり変更されたかの議事録が残っていたが、最も新しい(といっても80年以上前)昭和8年の増補加註に関してはその記録が残っていないとされていた。過去何人かの研究者もそのことを指摘している。その討議記録を矢野氏は見つけ出したのである。

「私自身も大変驚きました。これまで剣道の歴史、なかでも技術史を中心とした研究に取り組んできたので、それと切っても切り離すことのできない剣道形についてももう少し勉強しておかなければならないと思い、関連資料の蒐集に励んでいたところ、『剣道形資料一括』として10冊ぐらい(古本が)まとめて売りに出ていたので購入したらその中に偶然入っていた……。武専で使用されていた剣道教本なども一緒にあり、他の本に小川金之助先生の名前が入っていたので、小川先生の所有していたものかと思われます」と矢野氏は言う。

念のため説明を加えると、武専は大日本武徳会武道専門学校、小川金之助は大正3年から同校の助手となり、昭和4年に内藤高治が没したあと主任教授を務めている。戦後昭和32年に範士

十段となった。同時に入手した資料の中には小川の女婿である小川正之(範士九段)が、戦後、剣道形を指導するために作成したと思われる書類なども含まれていたようだ。

## 【抜粋2】

### 七本目の折敷胴と左足から出る動作への疑問も

もう一つ矢野氏があげたのは、太刀の形七本目である。これについてはさまざまな意見が出ていて興味深い。まず、折敷おしき敷しきいて(右膝を着いて)胴を打つという技術そのものについて、渡辺栄からこんな意見が出ている。

「膝を付けるのは後の技に応じる体配ではない。いわゆる抜き胴は中腰の方が実際稽古の上から言ってもいいと思う」

堀正平も、「立ったままに改正するべき」と述べ、「(折敷胴は)実戦にも試合にも不利である」と理由を話している。

「歴史的な流れからすると、折敷おしき胴は幕末期に遣われていたもので、それが

そのまま形に入ってしまったという状態で、もうこの頃にはほぼなくなりつつありました。学生剣道も盛んになっていて今の剣道に近い技が主流になっていきますから、その実態(竹刀打ち剣道)と形との摺り合わせをしたらどうかという意味で、折敷おしきくのではなく立ったままでもいいのではないかという意見が出てきたわけです」(矢野氏)

しかしこのときも、昭和56年にも改正されることはなく現代に至っている。

また、仕太刀が「右胴」を打つ、という記述について、「前胴または胴」とすべきという意見が近藤知善から出ている。

「この場合仕太刀は打太刀の左方にすれ違いながら打つものだから、右胴を打つということは実際において不可能である。事実としてこの形はみんな前胴を切っている」というのがその理由である。

現在でも同様の意見は聞かれるし、昭和56年の「解説書のできるまで」にも「右足を右前に開き、左足を踏み出して、右胴が打てるか等の問題点の論

議があったが審議会に諮って、原本どおりとすることに「なった」とある。

「昭和56年時、そこは原本の表記通り右胴のままという結論に至ったのですが、もしそのときにこの資料があれば、近藤先生がそのように指摘しているのであれば……、という方向に議論が進んだ可能性もあったかもしれませぬ」(矢野氏)

さらにもう一つ、七本目は現在も「打太刀は、左足を踏み出し、右足を踏み出すと同時に、体を捨てて諸手で仕太刀の正面に打ち込む」となっている。大正6年版では、

「打太刀ハ左足ヲ踏出し右足ヲ踏出すト共二體ヲ捨て諸手ニテ仕太刀ノ正面ニ打込ム」

となっているのに対し、近藤知善は、「打太刀は機を見て左、右と大きく踏み込み体を捨て」

という訂正案を述べ、その理由として、「左足を踏み出し右足を踏み出す」というのはかえって複雑だ。しかも右足を踏み出したときに面を打つのではなく、左足を踏み出すときにはすでに面を打つ動作に入っているのだから、この表現の方が分かりやすい」としている。

それを受けて近藤盛一は、仕太刀が左足を踏み出して胴を打つ動きも含め、こう述べている。

「我々は教習生に対して前進の場合は

絶対に右足より進み、後退の場合は絶対に左足から下がると固く注意している。武徳会本部においても武専の生徒や一般講習生に対しても同様に指導していると存じている。それなのに剣道の基本である帝国剣道形において、面を打つのに左足から踏み出すということ、胴を切るのに左足から踏み出すというのは、甚だしい矛盾であり、慨嘆に耐えない」

現在でも同じ考えの指導者はいるだろう。だが、逆に、剣道にはかつては左足から出る技もあったのだから、そういう技をもっと使うべきという主張もある。この七本目の左足、右足と踏み面、左足を踏み出しながら打つ胴はその論拠にもなっている。委員会がそういう意図のもとで決定したかどうかは分からないが、剣道の多様な技術を後世に残す意味では、これらの意見が採用されず、現在までそのままにされたのは幸いだったといえるのかもしれない。

### 【抜粋3】

「先々の先」「先」後の先」の説明は昭和の大家たちも分からなかった

もう一つ触れておきたいのは「説明」と見出しがついた文章である。太刀七本目までの勝つ理合の説明とい

うべき文章が、現在の『日本剣道形解説書』にも七本目の後に掲載されている。

それによると、一本目、二本目、三本目、五本目は「先々の先」で勝つ技であり、四本目、六本目、七本目は「後の先」で勝つ技とされているのだが、これが分かりにくい。現代剣道的に言えばすべてが「応じ技」であるし、とくに五本目(面すり上げ面)と六本目(小手すり上げ小手)は同じすり上げ技なのになぜ一方は先々の先、一方は後の先なのか。

この点については、大正元年の制定時においても、矢野勝治郎から、「先々の先」の『先々』は不要である。「初心者はかえって迷ってしまう」という意見が出ていた。大正6年の加註のときは、これについては審議されなかったという。

昭和8年には、「……『先』の説明は、古来の伝書にも、制定当時の委員の説明もなく、註解ができないため、制作者の意志を尊重して、そのまま掲載したということと後」に重岡昇が述べている(『詳解 日本剣道形』昭和51年刊)。

昭和56年にもこれが踏襲され、『日本剣道形解説書』でも、「従来からの申し合わせを勘案して、原本原文のまま掲載する」とされている。

しかし、昭和8年の討議記録を見

ると、この「説明」については「非難轟々」といっていいほど、何人もの剣道家が声を揃えて意見を述べている。

「先々の先、先、後の先の定義を定める事」(大島治喜太)

「先々の先、先、後の先の定義を定めよ」(堀田徳次郎)

「先々の先、後の先、先の説明を加えよ」(伊藤精司)

中山博道はさらに進んで、「先々の先、先、後の先、を初心者了解のできる言語に改め度し」と言っている。

齋村五郎に至ってはもっと否定的だ。

「先々の先、後の先、先の定義を以てしては七本の形の説明はできない。故に誰にも分り易い説明に改めよ」

たとえば制定当時の主査委員でこの加註にも加わっていた高野佐三郎はこれだけの意見を受けて説明しなかったのか、あるいは説明できなかったのか、は明らかではない。いわゆる三つの「先」の定義にも関わる問題であるが、当時の大家たちでさえこれだけ混乱しているものを、今後果たして説明することができらうか? できたとしてもそれが正解かどうか判断できるだろうか? そもそも制定した委員の中でも一部にしか理解されなかった普遍性のない理論なのではないか。疑問がさらにふくらんだともいえる。